

野口廃寺

各務原の古代寺院

編集 岐阜県各務原市
那加門前町3丁目1-3
発行 各務原市埋蔵文化財
調査センター
TEL 0583 (83) 1123 (代)
平成8年7月31日



野口廃寺A地区全景

■美濃の古代寺院

今から1400年ほど前の6世紀半ば(538年)に、当時の朝鮮半島にあった百済^{くだら}という国から日本に仏教が伝わりました。そして、日本で最初の本格的な仏教寺院である飛鳥寺^{あすかであら}が約半世紀のちの588年に建てられました。

それ以来、日本各地には多くの寺院が建てられましたが、この岐阜県的美濃地方にある古代寺院の多くは、遺跡から出土する瓦などの年代によって、ほぼ7世紀後半代から8世紀にかけて建てられたことがわかっています。

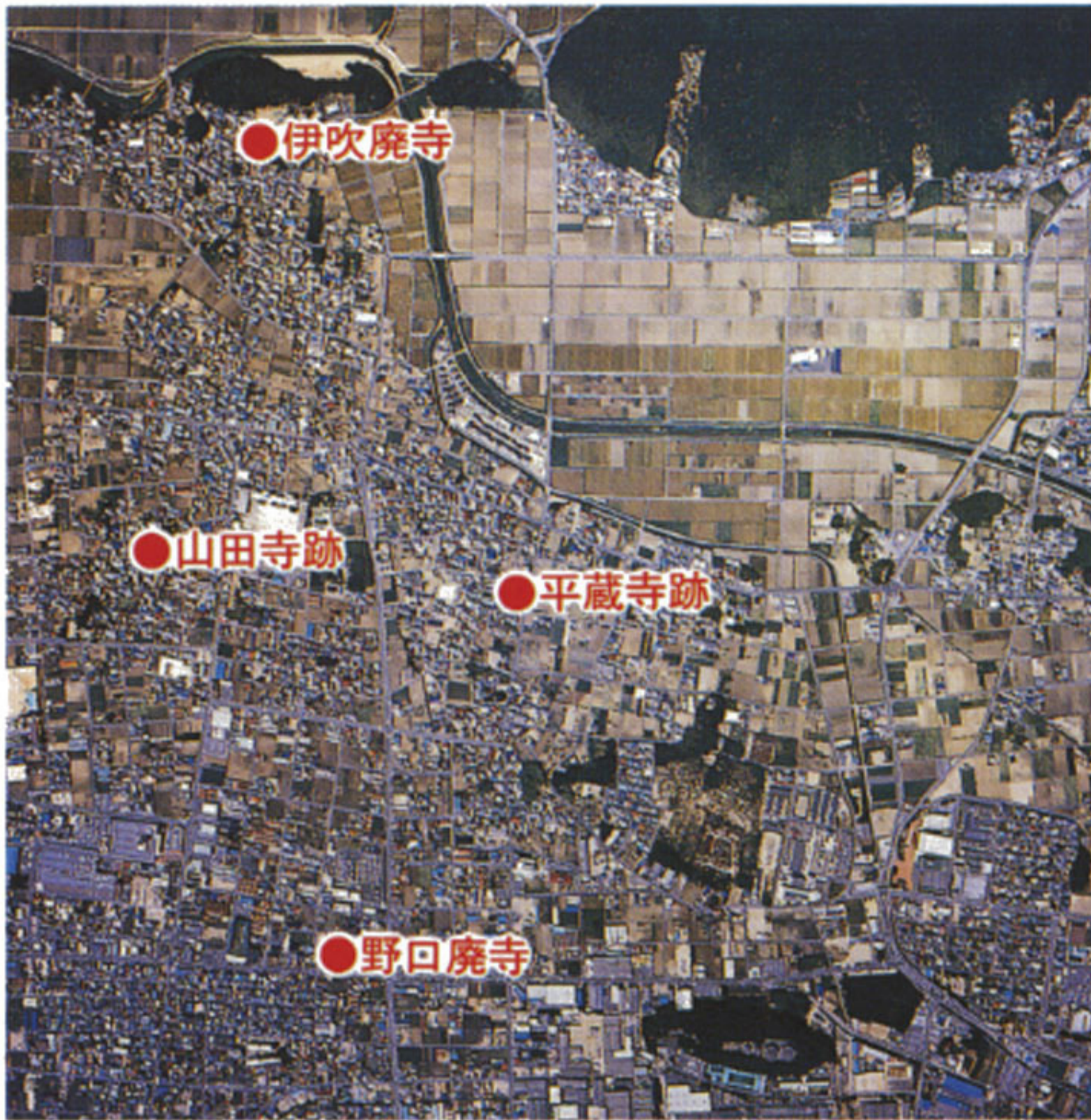
■各務原の古代寺院

各務原市は、木曾川の北岸にあって美濃のほぼ中央部に位置しています。各務原台地と呼ばれる広大な台

地が広がるこの地域は、原始時代からの遺跡が多く所在する地域でもあります。

この各務原台地の中央北部を占める蘇原地区に野口廃寺があります。各務原台地が北側を流れる境川にむかって舌状に突き出して行く基部に所在し、現在では土地改良などで本来の地形が大きく変わっていますが、遺跡のすぐ北側と南側には、それぞれ西にむかって延びる谷が入り込んでいました。

蘇原地区には、この野口廃寺^{のぐちはいじ}以外に南約500mに長者屋敷廃寺^{ちやうじやしき}、北西約1kmに山田寺跡^{さんでんじ}、北東約800mに平蔵寺跡^{へいぞうじ}、さらに北約1.5kmには伊吹廃寺^{いぶき}があります。このわずか東西約1km、南北約2kmほどの狭い範囲に、今から1200~1300年ほど前の寺院跡が5カ所も所在するという事は、この地域の歴史的な重要性を物語っていると云えます。



1. 野口廃寺位置図



2. 鑄造遺構



3. 鑄造遺構出土鋳滓

ところで、各務原市内には、この他に北東約6kmの所に各務廃寺という遺跡がありますが、出土瓦の型式からみて、蘇原地区の寺院跡より約100年後の奈良時代後半に建てられたと考えられます。

■野口廃寺の発掘調査

さて、野口廃寺は、現在の蘇原新栄町2丁目に所在しています。この地域は近年急速に市街地化したため、そうした開発事業に伴う発掘調査が野口廃寺の範囲内でも行われました。平成3年と平成7年にそれぞれA・B地区として実施された発掘調査では、小面積にも関わらず多くの貴重な成果をあげることができました。

発掘調査の結果から、A地区では少なくとも3時期の建物跡が発見され、それとは別に寺の梵鐘^{ぼんしょう}などを製作した鑄造遺構^{ちゅうぞう}も発見されました。この鑄造遺構は奈良時代前半代に造られ、年代からすれば全国でも6番目に古いものです。また、調査区の西側からは寺の敷地を区画する溝が発見されましたが、その埋土には火災によってできたと思われる焼土が流れ込んでいました。

一方、B地区では、地面を固く叩き締めた版築状遺構も検出されています。

■基壇状遺構 (A地区)

周りに区画溝を巡らす遺構です。規模は東西約14m、南北約11mで、溝の幅は約2~3mです。南側の中央に通路と思われる陸橋部があり、溝の埋土から釘や、須恵器が出土しました。しかし、残念ながらここにどのような建物が建てられていたのかは、すでに基壇のほとんどが削平されていたため明らかではありません。時期は出土した須恵器の年代から奈良時代初頭と考えられます。

■鑄造遺構 (A地区)

基壇状遺構の西側を掘り込んで造られたもので、約2.7m×1.5mの方形土壇の中央に、直径約1.2mの定盤^{ていばん}と呼ばれる鑄型を設置する土台が残っていました。そして、この定盤の南側の一部は、それ以前に掘り込まれた楕円形の土壇を埋めてつくられていたことから、この鑄造遺構では何度か製品を作る作業が行われ、施設の改修がなされていたと考えられます。

ほったてばしらたてものし

■掘立柱建物址（A地区）

建物址は4棟発見されました。そのうち1号建物址と2号建物址は重複していましたので、少なくとも1度建て替えが行われて、2時期にわたって使われていたことがわかります。1号建物址と4号建物址は2間×2間の約4m四方の規模を持ち、2号建物址と3号建物址は2間×3間で、2号建物址が6m×3m、3号建物址は約7m×2.5mの規模です。ところで、この掘立柱建物址の年代は、それを直接示す土器などが出土していないので明きらかではありませんが、鑄造遺構の上に2号建物址が作られていることから、おそらく鑄造遺構の後、奈良時代の中ば頃と考えられます。

■溝状遺構（A地区）

調査区の西側で発見されました。他の遺構と方向をそろえて延びていることから、寺域全体を区画する性格を持つものと考えられます。注目すべきは、この溝の埋土には東側から焼土が流れ込んでいたことです。また、それとともに多くの瓦や須恵器、そして鉄製品や瓦塔がとうなどが破片となって含まれていました。こうした遺物の出土状態は、あきらかに火災による建物の倒壊で生じたもので、推測として掘立柱建物址のどれかが火災にあったのではないかと考えられます。

須恵器のなかには、「寺」や「祢」などの文字を墨で書いたものや、寺の生活で使われていた灯明皿・転用硯などがあります。また、瓦塔とは、寺院の建築物を小型の焼き物で模倣して作ったもので、主に屋内に安置して奉る特殊な焼き物です。溝が埋まった年代は、須恵器の型式から奈良時代後半と推定されます。

はんちくじょういこう

■版築状遺構（B地区）

B地区で発見された地面の整地層です。土層の断面観察によれば、黒色土と地山黄褐色土を交互に縞状に重ねて叩き締めた状態にあり、何らかの建物基壇か整地作業によるものと考えられます。しかし、全体の規模が調査範囲外に及ぶことや、後世の著しい削平を受けていることから、詳しい性格については不明です。ただ、このB地区を中心とする範囲で、大量の瓦を投棄した後世の土壌が見つかっており、そのなかには大



基壇状遺構（A地区）区画溝出土釘



溝状遺構出土（A地区）「寺」墨書須恵器（有台坏）



溝状遺構出土（A地区）灯明皿転用須恵器無台坏



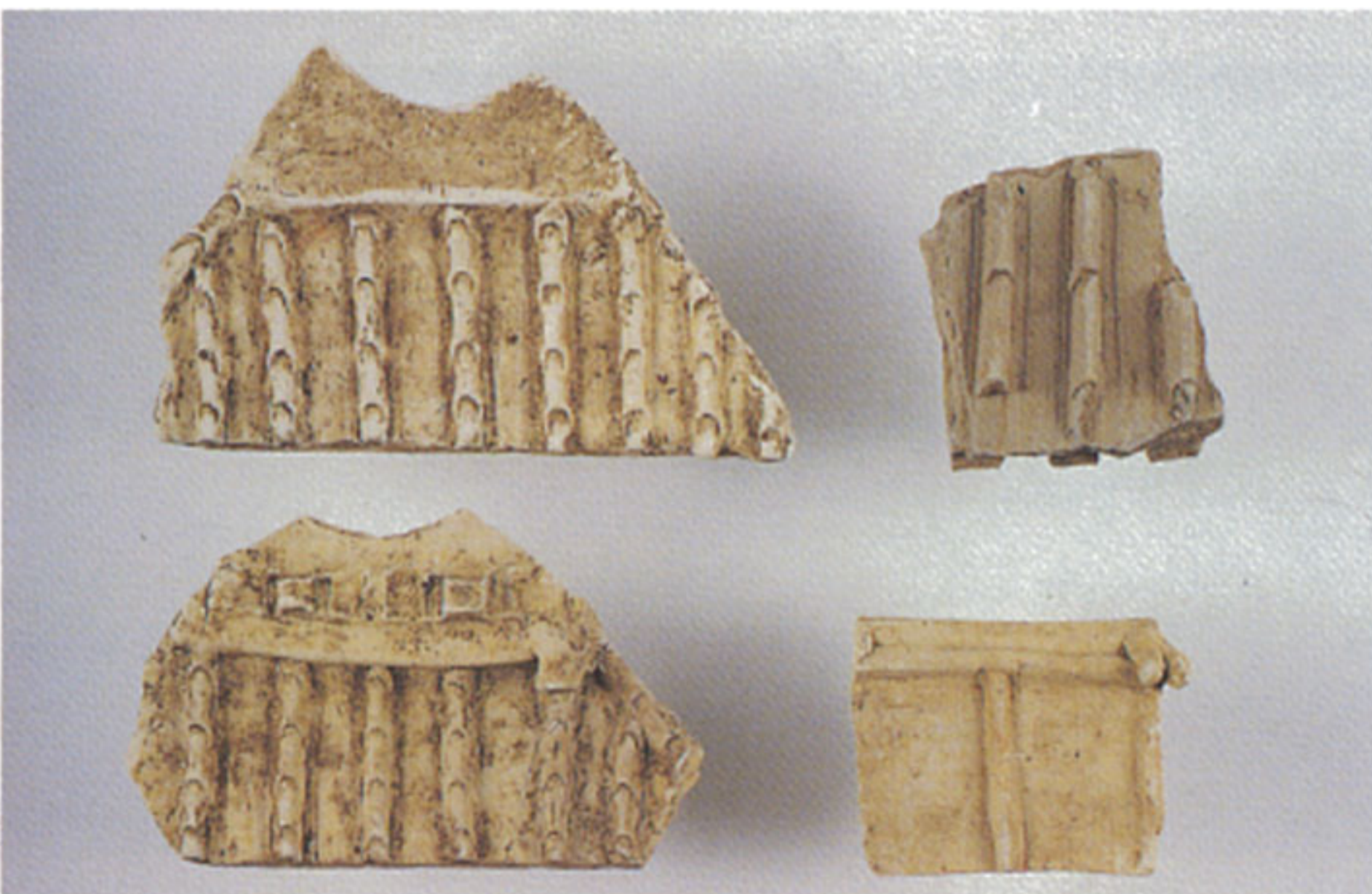
野口廃寺B地区4号・5号土壇瓦出土状況



複弁八葉蓮華文軒丸瓦（B地区出土）



重弧文軒平瓦（B地区出土）



瓦塔（A地区出土）

規模な建物の棟を飾る^{しび}鷗尾もあることから、あるいは、ここに寺院の中心となる^{どうとうがらん}堂塔伽藍の一部が建てられていた可能性もあります。

■野口廃寺の時代

奈良時代には、法に基づく^{りつりょうたいせい}律令体制という中央集権国家体制のもとに^{かんりょうきこう}官僚機構が整備され、全国に^{こくふ}国府が置かれ、さらには郡にも「^{ぐんぷ}郡府」や「^{ぐんけ}郡家」などという役所が置かれていたとされています。こうしたいわば官庁街とも言うべき区域の近くに、多くの場合、大規模な寺院が建てられていました。

こうした寺院は、地方の国の段階では^{こくぶんじ}国分寺・^{こくぶんどじ}国分尼寺と呼ばれるものですが、それとは別に、地方の有力者（^{ごうぞく}豪族）などが私財をもって建てる寺院もあったのです。このような寺院を^{うじでら}氏寺と言いますが、野口廃寺やその他の各務原市内にあった古代寺院は、おそらくこの氏寺であると考えられます。

では、なぜこのような性格の寺院が、これほど多く蘇原地区に集中して建てられたのでしょうか。残念ながら今ここでそれを語るだけの資料はありませんが、ひとつには、蘇原地区が当時の各務郡（現在の岐阜市岩滝地区・芥見地区を含む）の中心地であったと考えられることと、もうひとつには各務郡の豪族たち（^{むらくにし}村国氏・^{かかろし}各務氏・^{かかろのすけりし}各務勝氏など）が当時の国や朝廷と強い結びつきを持っていたことが考えられます。そのため、寺院建立にかかる莫大な財政的援助や技術的支援を受けることが可能だったのではないのでしょうか。

各務原市の古代寺院は、次の平安時代以降になるとなぜか廃絶に向かうようです。寺院跡からの出土遺物にも、奈良時代以降の寺院に関連する遺物は見られません。おそらく、平安時代に入って律令国家の力が衰えとともに、国の中央集権政策としての寺院存続の意義がなくなったのではないかと考えられます。

それに替わって平安時代には、最澄・空海が開いた天台宗・真言宗などの新仏教が貴族層に受け入れられ、新たな発展をとげることとなります。

奈良時代の巨大^{かんりょうきこう}官僚機構と宮都・官衙・寺院などの大規模建造物造営による中央集権国家体制の終わりは、こうして地方から始まったと言えましょう。